つながる保育

～子どもの分かる・楽しいを広げるために～

姫路市立白鳥園
保育士　小坂　好加
柳井友実子

【はじめに】

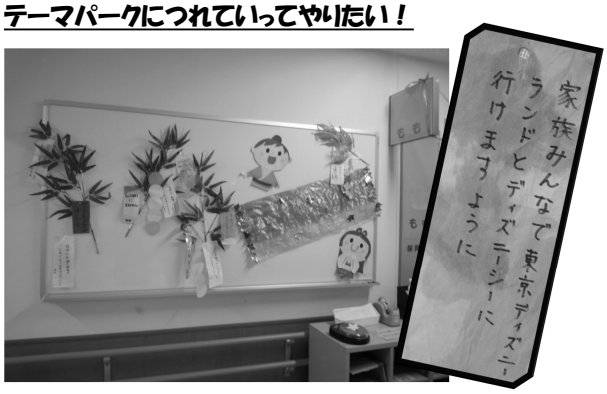
白鳥園では、動く楽しさを感じる活動として「運動遊び」を年間通して取り入れている。運動遊びで楽しんでいる活動を「テーマパークでの遊び」に見立てて実践したことについて報告する。

【実践内容】

１．テーマ設定のきっかけ

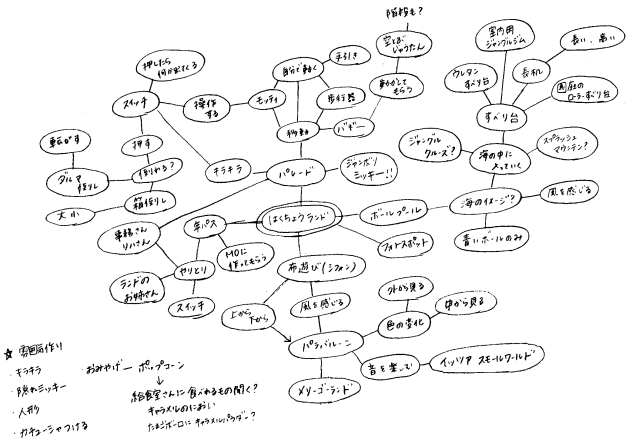
七夕の時「家族みんなでテーマパークに行けますように」という、保護者の書いた短冊があった。他の保護者からも「うちの子には楽しめるアトラクションが少ない」「何回も行けないからドキドキするだけになりそう」「知らない人にびっくりしてしまう」など、つれていってやりたいが、難しいという思いを抱えている声が聞かれた。

テーマパークにつれていってやりたい！



保護者の願いを実現するため「テーマパークで遊ぶ」をテーマにして、保育を展開していくことにした。どのような要素を盛り込むとテーマパークの遊びを広げていけるかについて、担当スタッフに加え、様々な職種にも意見を求めた。

すべり台やボールプールの遊びをアトラクションに見立てる、入園パスポートを作る、「はくちょうランド」と名付ける等、遊び心あふれるアイデアが集まった。



〈遊びの展開図〉

２．保育を展開する中で大切にしたこと

同じ動きであっても、感じ方は子どもによって異なることを意識し、頭部を安定させる姿勢を整えること、少ない動きから始め、子どもが「楽しい」「心地よい」と感じられるかを確認しながら遊びを広げていくこと、楽しめるようになったことに新しい動きを少しずつ加え、姿勢や動きのバリエーションをつけて広げることをポイントにし、自分で動いていることを感じられるようにした。

遊びは、テーマパークのために新たな活動

を考えるのではなく、ボールプールやすべり台など、子どもが楽しんできた遊びをアトラクションに見立てるようにした。また、少しずつ遊びのバリエーションを広げ、テーマパークの環境（雰囲気）を整えることで、子どもが楽しめるテーマパークを作った。

白鳥園は、月曜日は親子保育、火曜日から金曜日までは単独保育を行っている。その親子保育の中で、一緒に遊びを経験し、親子で楽しさが共有できるようにし、単独保育で子どもが楽しんだ様子は、送迎時に伝えたり、親子保育で確認したりして保育をつなげていった。そして、保護者も楽しめる環境作りを意識した。

３．具体的な遊びの取り組みについて

アトラクション①

はくちょうマウンテン＜すべり台＞

自分で動くことが感じられるように遊びを展開した。ウレタンすべり台や机を傾けて作ったすべり台などを使い、高さや長さなどに変化をつけて、バリエーションを広げた。また、横向きやうつ伏せなど、姿勢に変化をつけたり、スライディングシートを使ってスピード感を出したりして、遊び方のバリエーションも広げた。スライディングシートを使ったことですべりやすくなり、自分ですべることの楽しさを感じ、何度も繰り返し楽しむことができた。

一人で座ることが難しい子どもは、療法士と相談し、自分ですべることができる姿勢を整えた。また、自分で勢いをつけて進む、体を傾けることですべり出す、子どもが大人を見たことをきっかけに動かすなど、それぞれの“自分ですべる”ことを大切にした。

アトラクション②

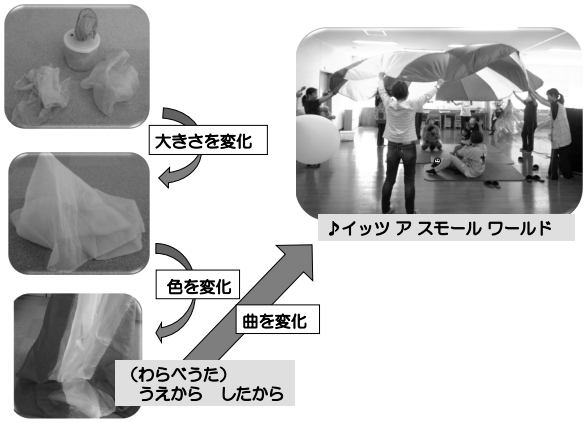
はくちょうクルーズ　＜ボールプール＞

まず、ボールを見たり触れたりすることから始めた。たくさんのボールに戸惑う子や初めて経験する子も安心して遊び出せるように、少しずつボールの量を増やした。また「楽しそうだな」「やってみようかな」と思えるように、友だちの楽しんでいる様子をじっくり見る時間を大切した。

中に入って遊べるようになった子どもには、ボールの上をすべる楽しさが感じられるように、段ボール製のイス（バケット）の尻部分に穴をあけ、すべる度にでこぼこ感や揺れる楽しさが感じられるようにした。

アトラクション③

イッツア　はくちょうワールド
＜布・わらべうたあそび＞



わらべうた遊びで使うシフォン布の大きさや色を変え、バリエーションを広げながら、

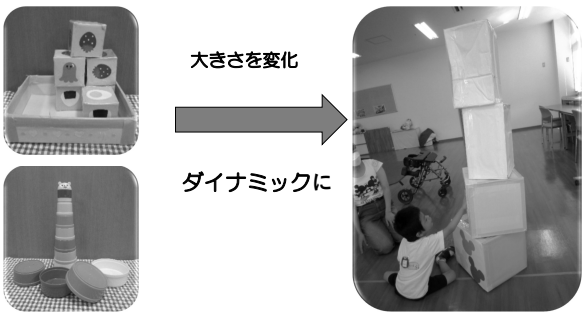
素材や大きさの違うパラバルーンでの遊びにつなげた。

なじみのあるわらべうた遊びを続けたことで、素材や曲が変化しても「知っている遊び」として安心して楽しむことが出来た。

アトラクション④

TSUMO TSUMO ＜箱たおし＞

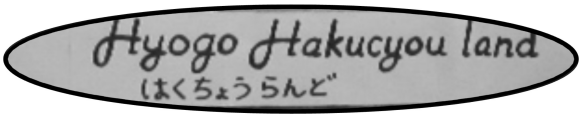
積む・重ねる　→　倒す



大きさや形に変化をつけた。箱を大きくすることで、倒れたことが分かりやすくなり、手や足、歩行器などを使ってダイナミックに倒す遊びにも広がった。

アトラクション⑤

はくちょうパレード＜移動・体操＞



保育室から、はくちょうランドへ到着するまでの間には、テーマ曲を流した。職員がランドスタッフとして出迎え、雰囲気が味わえるような装飾をした。同じ曲のダンスを踊ることで、子どもだけでなく保護者も一緒に楽しんでくれるようになった。

子どもたちは　繰り返しの中で　曲と場面を関連付けるようになり、聞くとつもりを持って参加できるようになった。

４．開園

１回目（９月）は、今まで保育室で積み重ねてきた遊びを広い部屋に設定し、親子で好きな遊びを選んで楽しめるようにした。

２回目３回目(10 月)は､遊びに変化をつけ、今日のアトラクションとして設定した。環境も、よりテーマパークの雰囲気に近づけるよう整えた。子どもの楽しんだ遊びをもとに、はくちょうランドを積み重ねていったことで、主体的に遊ぶ姿が見られるようになった。

４回目（11 月）は、普段保育に参加することの少ない父親と経験する機会を作った。子どもが普段から楽しんでいる遊びだったので、子どもがリードするような雰囲気の中、緊張気味の父親も一緒に楽しんでもらうことができた。

共通の話題ができたことは、家族での会話をつなげるきっかけになった。

５．遊びのイメージを広げる工夫

⑴ 海をイメージできるように、ボールの色を全て青にする

⑵ 水しぶきや風を感じながら遊べるように、霧吹きや扇風機を活用する

⑶ ぶどう狩りごっこで使った葉っぱ・カラートンネル等を組み合わせ、ジャングルのイメージを作りつつ、自分が動いていることが分かりやすいようにする

⑷ 事務職員なども、はくちょうランドスタッフとして参加してもらい、知っている人や場所を増やす

⑸ 食事場面もランドの雰囲気を感じられるよう、給食をキャラクターの形にする

雰囲気作り

４事務職員

５給食部

６．保護者と共にわくわくする環境作り

テーマパークのイメージに近付ける環境として、フォトスポットの設置、保護者による入園パスポートの作成、遊び心あるアトラクションのネーミングなどの工夫をした。

保護者も楽しんで参加できるように意識したことで、保護者の遊びに向かう気持ちが高まり、子どもと一緒に遊びを楽しむことができた。また保護者の楽しそうな姿を見ることは、子どもたちが楽しい雰囲気を感じ、意欲的に参加することにつながった。

わくわくする環境作り

フォトスポット

入園パスポート

遊び心のある
ネーミング

また、子どもがより楽める方法を、保護者に考えてもらう機会を設けた。保護者の気付きを遊びに取り入れることで、子どもの遊びが広がったことは､保護者の自信にもなった。そして、担任にとっては保護者と共に、子どもの遊びや生活を考える大切さを改めて確認する機会となった。

【まとめ】

はくちょうランドで遊ぶ際に、安心グッズが必要、離れたところから見て参加するなどしていた子どももいたが､子どもの“分かる･楽しい”をもとに遊びを展開したことで、安心して楽しめるように変わってきた。

一人一人のタイミングやペースで好きな遊びに向かい、主体的に遊びを楽しむことは、遊びや生活の経験の幅を広げることになるのだと実感した。

今回の取り組みを通して、子どもが主体的に遊ぶには、一人一人の“分かる・楽しい”を探し、安心して遊べる環境を整えることが必要だと感じた。“分かる、楽しい”が感じられるようになると、楽しそうな表情、自分から動き出すなどの姿が見えてきたが、それは「やりたい」と大人を見たり、声を出したりして、自分の気持ちを伝える力を育んでいくことにつながると実感した。

子どもは､遊びや生活の中で様々な人や物、場所と出会い、知っていることを増やしていく。知っていること、分かって楽しめることが広がることは、意欲につながり、子どもが自信を持って選んで生活し、自分の人生の主人公として生きることになる。

これからも子どもたちにとって、“分かる･楽しい”を広げ、つながる保育を続けていきたい。